

経営学は実践にどのように役立つか（3）

経営学の科学性

前回まで、経営学の科学性について説明しようとしていたところでした。自然科学における因果律（「A ならば B」の関係）は完璧であるのに対し、その対極にある人文科学では、原則的に因果律のない（1 回限りの）人間の活動に関心がある、ということについて説明してきました。

経営学は、一般的には社会科学の一分野と認識されています。少し回り道になりますが、まず社会科学とは何か、そもそも「社会」とは何かをきっちり理解したうえで、経営学の位置づけ、経営学と実践との関係について議論することにしましょう。

緩い因果律

このお話の到達点をクリアにするため、先に結論から述べるとすると、社会科学の世界では「緩い因果律」が支配している、というところがオチになります。

緩い因果律というのは、自然科学ほどの完璧な因果関係では無く、また人文科学のように 1 回限りの個人の活動を取り上げるのでも無い、敢えてその両者の関係で言うと、自然科学と人文科学の中間に位置する曖昧さを含んだ領域……これが社会科学です。

文科系学問の特徴

社会科学は、人文科学と合わせて、いわゆる「文科系」と総称される領域で、時に人文社会科学というように合わせて呼ばれる場合もあります。人文社会科学とは、人間の意思や行為によって生み出された様々な社会現象を記述したり、あるいはそれらを支配している社会の法則性（ここでいう因果律です）を解明したりする学問領域の総称です。

歴史や文化、政治、経済、法律、社会などを分析対象とします。自然科学よりも人文社会科学の説明がより難しいのは、社会現象を規定している法則性が、自然科学ほど明快に観察することができないためです。

裁判官の判決

前回、歴史学の例を挙げましたが、ここでもう 1 つ、社会科学の代表選手である法律学の例を挙げてみましょう。

例えば、同じ法律違反でも、時と場合によって様々な状況判断がなされることは周知の事実です。A という罪を犯した場合には B という判決が下る、という絶対的な規則が定まっているわけではありません。その都度、裁判官がその犯罪の周辺状況について調査を行い、場合によっては「情状酌量」がなされることはままあります。

このように、人文社会科学が対象とする人間社会の世界で完全な法則性が観察されない

のは、前回も見たように、ひとえに人間社会の決まり事を作ったのもまた人間であり、その規則性の程度（因果律）が自然現象を支配している法則性に比べると遙かに緩いためです。

文科系の勉強は難しい

ですから、人文社会科学を学習する場合には、自然科学での完璧な世界とは違い、いくら勉強してもわかったようであり曖昧で漠然としていて、どこかすっきりしないという印象を持つ人が多いはずです。それは何もその人の勉強が足りないからではなく、人文社会科学の勉強はそもそもそういう性質を持ったものであるという理由に依るのです。

このように、経営学をはじめとする社会科学においては、人間社会の現象を支配する「緩い法則性」について解明しようという志向性があります。人文科学では法則性はまず出てきません。社会科学は、緩いですが少しだけ出てきます。その意味で、自然科学と人文科学の中間が社会科学であるとも見ることができます。

そもそも社会とは

社会科学が前提としている「社会」とは、そもそも何でしょうか。実は、社会とは、人間ひとりひとりの個々人ではなく、人間と人間の間に織りなされる「関係」——これが社会という語の原義です。

ただ、ひとくちに人間と人間の関係といっても、そこには実にさまざまな関係があります。社会科学に於ける諸学問（法律学、政治学、経済学、経営学など）は、それらの多様な関係のうち、ある特殊な1つの関係に特に注目して「社会」を分析しようとしているのです。

それぞれ、どういった関係に注目しようとしているのでしょうか。次回、より詳しく見てみることにしましょう。

株式会社インソース <http://www.insource.co.jp/>

〒101-0054 東京都千代田区神田錦町 1-19-1 神田橋パークビル 5 階

TEL : 03-5259-0070 FAX : 03-5259-0075